

協会の歩み 110号 平成20年11月

北海道ペストコントロール協会

ペストロジー学会大阪大会

平成20年10月16～17日 新大阪メルパルク



シンポジウム



パネル発表

毎年秋、我が業界最大の行事、ペストロジー学会が新大阪で開催された。今回の特徴はメインデッシュが多すぎて、消化不良になるうかという内容であった。先ず、スイスのWHO本部からこの大会のために帰国された一盛和世女史による世界の媒介昆虫の話、サモア諸島で実績を上げたフィラリア糸状虫による、巨大に腫脹した足や陰囊の写真にショックを受け。次いで、シンポジウムは「一般家庭におけるちょっと気になるいやな虫」と簡単な題目だが、中身は非常に濃い内容。国立感染研の Dr.小林による主に蚊の話、チカイエカとアカイエカの血の嗜好性は DNA 鑑定で半分が鳥類、残り半分が哺乳類とか、日本への侵入が恐れられているウエストナイルウイルスは鳥類の体内で爆発的に増えるので、鳥の血が好きなイエカ類は日本人にとって非常に脅威的、最近山形まで北上しつつあるヒトスジシマカはモーリシャス、マダガスカルで猛威を振るっているチングニア熱を媒介することが判明し、北イタリアの一部で患者が出たことから、我国でも警戒をしなければならない。京大の Dr.吉村はヒラタキクイムシに代わってアフリカヒラタキクイムシが全国で増えてきたこと、アメリカカンザイシロアリが確実に北上しつつあることを説明した。

今回の発表形式は口頭発表とポスター発表が同時に行われ、どちらを選択するかが困難だった。また口頭発表が次の座長を務めるなど、若手研究者育成を意識した進行であった。しかし、若手は勿論のことベテラン勢も座長を頑張りすぎて時間が延長気味、しかもつまらない質問には参加者にとってうんざりといったところだった。

でも、懇親会は過去最高のノリだった、筆者がハワイアン奏者なためでもあるが、国田日ペ理事の親友桶谷氏がフラダンサーを引き連れてのハワイアンショー（私もマラカスで参加）。続いて狩野大阪理事が一家総出でオールデーズを、大阪のおばさん&おじさんガンバルがんばる。のせられた Dr.田原と一盛女史がジルバを踊りだす場面もあった。

北海道からの参加者は倉田会長、青山理事、高安顧問、諏訪氏の4名。発表は青山のワラジムシに関する発表。

(文責青山)



平成20年度北海道高病原性鳥インフルエンザ防疫演習

路上消毒作業はPCO協会に依頼は確定か？



北海道と北海道家畜産物衛生指導協会の主催で初めて、大規模な鳥インフルエンザ防疫研修が10月3日に行われ、北海道PCO協会からも参加した。開催場所が北広島市の芸術文化ホールである理由は、北広島から千歳にかけて道内有数の養鶏地帯だから。従って、養鶏場からの参加者が多かった。珍しいところでダチョウ飼育者なども。他に畜産、公衆衛生、鳥獣保護などの関係者、学術研究機関、厚生労働省、東北の県、市町村などからの参加者で会場満席となった。講習&演習会場、展示会場の2箇所に分けたが、我がPCO協会は展示物の貸与で協力した。講習は

「高病原性鳥インフルエンザ発生時における防疫の基本方針」

以上家禽の通報から簡易検査 インフルエンザの確定 緊急措置 移動制限区域設定手順、初期症状の見分け方などの説明

「高病原性鳥インフルエンザ発生時における防疫従事者の感染予防対策について」

すでに出された通達などから従事者にとって必要な装備や手順をわかりやすく解説。

「机上演習 高病原性鳥インフルエンザ発生時の対応」

我国ですでに感染予防が成功した地区の豊富な情報から、写真を駆使して具体的な処置法を解説。このときに路上での消毒作業はPCOに依頼しなければならないとの説明があった。

実地演習はオホーツクに面した採卵鶏舎を想定して、防護服の着用から鳥の殺処分までを会場内で模擬実施が行われた。紙に書いた鶏ではあったが、道職員は皆、真剣そのものの行動であった。